

※無断転載はお断りいたします。

## 『ロミオとアンジュレッタ』

作 あねとあなた

初めて、唇にキスをした。大好きな男の子は今日、お城を出て学校で暮らす。彼はこの国の王子様。「クリスマスには帰ってくるからね。」と頭を撫でてくれる。

涙を流しながら、毎日一人で寝た。お父様とお母様がいるのに私は淋しくて、“夜尿（おねしょ）”をするようになった。ロミオに会いたくて、城を抜け出し、お菓子とアクセサリーを持って飛び出した。アクセサリーと交換で馬車に乗せてもらい学校に着いた。

でも、学校は男子校で、目立っちゃう。すると、グーとお腹の音がした。振り向くとロミオより少し大きな女の子がいた。

「私、最近転校して来た子の恋人なの。お菓子をあげるから、会わせてくれない？」  
女の子は、

「お菓子？でも、生徒さんには会えないわよ。」

と言った。私は、

「どうして？」

すると女の子は、

「ここ男子校だもの。会ったり出来ないわ。私はここへ料理をしに来ているの。

でも、今日は失敗して…。」

私は、お菓子を目の前に見せた。

「お腹空いてるけど、言う事聞かないわよ。」

女の子が言う。

「違う。授業の後、売るの。その時、彼を見つける。これは味見用よ。」

女の子は笑って、クッキーを食べた。他の従業員さんに話をしてくれ、一時間後、校舎の外でクッキーを売り、ロミオを見つけた。ロミオが、

「アンジュレッタ、会いたかったよ。」

抱きしめてくれた。

私はそうして、何度かロミオに会いに行った。だけど、何度もお城を抜け出して外へ行ったので、見つかってしまい、外出できなくなった。私はまた夜尿をして泣きなが

ら寝た。私の夜尿は止まらなくなって、お母様達は、お医者さんをお呼んだ。だけど、それでも止まなかった。

ある日、隣国のジャンヌという教育家に、

「男の子も女の子も一緒にお勉強できればいいのに。」

と言ったところ、ジャンヌは、

「私の祖国では男の子も女の子も一緒にお勉強するの。お姫様、王様と妃様に言ってみたらどうですか？」

と言った。私は泣いてしまい、

「私の言う事なんて聞いてもらえない。」

と言った。

「辛くても、何度も言うの。頑張るって。」

と言うとジャンヌは、また他の国へ行ってしまった。

「お父様、お母様、男の子と女の子が一緒に勉強できる学校を作って。私、ロミオに会えなくて心がぐちゃぐちゃ…。」

そうして、また泣いた。お父様は、私を抱き上げて、

「ジャンヌに聞いたよ。悲しい気持ちにさせてしまった。城に学校を作ろう。」

と言った。

ジャンヌ、ありがとう。

程なくして、城に学校が出来た。ロミオも、戻ってくる。だけど、町の人達がお父様の事を、

「学校を作るなんて、無駄。王は愚かだ。」

と言った。冬になり、病気が流行り、学校を作った王への評判が下がったのだ。

私は、町の病院へ行ってお手伝いした。病気がうつらないように手を洗い、うがいをした。病人さんの着替えの手伝いをしたり、身の回りのお手伝いをしたり、病人さんの記録を書いたりした。その時、病気の快復した患者さんに字を教えた。病院を去る時には、字が書ける人がちらほら出た。学校も、子供に必要なだと分かってもらった。もちろん、お父様への人気も上がった。

そして、クリスマス。ちょっぴり背の高くなったロミオが、馬に乗って帰ってきた。

「ただいま、僕のお姫様。」

キスする時、バネトーネの香りがした。

「今日から、また一緒だね。」